



もくじ

展示紹介
浮世絵でみる江戸の暮らしと食の歳時記 P1~3
藤沢食の名物あれこれ~藤沢市所蔵作品から~ P4
浮世絵こぼれ話13 歌川国貞(三代豊国)と歌川広重の合筆 P5
二代目オニカゲ学芸員のページ⑤ 浮世絵の「見立」/浮世場なれ/編集後記 P6

浮世絵でみる

藤沢市藤澤浮世絵館 開館5周年記念

公益財団法人 味の素の文化センター所蔵

江戸の暮らしと食の歳時記

会期 2021年11月16日(火)~12月12日(日)

「食」にまつわる浮世絵を集め、江戸時代の人々が季節の移ろいと共に巡りゆく食の旬を楽しみながら活き活きと生活する姿をご紹介します。公益財団法人 味の素の文化センター所蔵作品からは、江戸時代に人気のあった食べ物が描かれた作品を、藤沢市所蔵作品からは、地域に伝わる食文化に関する浮世絵と資料を展示します。味の素の文化センターには、江戸時代から明治時代にかけての日本の食の歴史が俯瞰できる充実したコレクションがあり、現代でもおなじみの食材が、江戸時代ではどのように扱われていたのかが垣間見える重要な資料として知られています。普段、私たちが口にする和食のルーツの多くは江戸時代にさかのぼります。そうした現代にもつながる食文化の世界を浮世絵からお楽しみください。



【図1】歌川国貞(三代豊国)「ふきや町 市村座大入り あたり振舞 楽屋之圖」文化8年(1811) 味の素の文化センター所蔵



【図2】
台の上には料理がずらりと並んでいます。

【図1】は幕府公認の芝居小屋の一つ、「市村座」の様子を描いています。興行が成功し、利益が上がった時に、大夫元（興行主）が俳優や関係者を招待して宴を開くのが習慣でした。

【図2】は【図1】の中図を拡大した図で、台には大皿に盛られた料理と散蓮華が見えます。散蓮華は現在も使われている柄の短い陶製の匙（スプーン）です。匙は、奈良時代に金属製のものが箸と共に上流階級の人々に使われていましたが、中世になると箸だけになります。しかし、江戸時代になると、長崎に伝わった卓袱料理（中国料理を日本風にアレンジしたもの）で再び使われるようになります。

江戸の絶品料理が勢ぞろい

●鰻

【図3】は、尾張町（現在の銀座のあたり）に実在した大和田源八店で、江戸で人気の店でした。鰻といえば蒲焼が連想されるようになったのは、調味料にみりんが使われるようになったことが要因の一つだといわれ、関東での生産が増え始めた18世紀末に蒲焼人気も高まりました。本図は三枚続のうちの右図であり、他の二図では、食事を運ぶ給仕の様子や鰻を団扇であおぎながら焼く様子が描かれています。



【図3】勝川春亭「題名不詳（江戸大かばやし）」
文化前期（1804-1810）
味の素食の文化センター所蔵

●鍋

江戸時代の冬の必需品の一つが火鉢です。部屋の中に火鉢を置いて寒さをしのぐ以外にも、湯を沸かしてお茶

を飲んだり、鍋を囲んで食事をすることもありました。

【図4】は炬燵と火鉢の間に座り、暗い部屋の中で、食事を楽しむ姿が描かれています。長火鉢で煮える鍋の中は黄色く、卵とじのようなものを食べています。当時の鍋は、汁物と煮物が合わさったようなごった煮料理で、火鉢と鉄鍋だけで手軽に作ることもできる上、準備も片づけも簡単でした。手前のお膳には徳利や小鉢も描かれていて、豪華な食事を楽しんでいます。

後ろの暗闇には、上部に雲母摺（顔料に雲母を混ぜて摺る技法）が使われています。間近で見るとキラキラと光り、写真では分かりにくく実物で見ると楽しめる表現です。



【図4】二代歌川国貞「東京美女ぞろひ 柳橋きんし」明治元年（1868）
味の素食の文化センター所蔵

●砂糖菓子

【図5】は、縦2枚続の浮世絵で親子の穏やかなひとときが印象的です。母親は子供の髪を結び、子供は籠の中の果物を食べていますが、これらは全て金花糖と呼ばれる砂糖菓子です。有平糖あるへいとう（室町末期に伝来した南蛮菓子）の一種で、白砂糖を練って、果物や花などを象った型に入れて固めてつくりま

源氏絵から見る食事の風景

古典の『源氏物語』を下敷きにした、柳亭種彦作・歌川国貞りゅうていしゅねひこ（三代豊国）画の合巻『修紫田舎源氏』しゆむらさきいなかげんじ（文政12-天保13年〔1829-1842〕）の挿絵から着想を得た「源氏絵」という様式がありました。当初は、小説に由来したテーマで描かれていましたが、出版統制や時代の流行から表現方法も変化し、小説の挿絵から次第に離れ、小説とは無関係の源氏の絢爛豪華な世界を強調した題材も登場してきました。

ここでは『源氏物語』の帚木ははきぎの巻で、五月雨の夜に、宮中の宿直所に主人公・光源氏ひかるげんじを囲み、頭中将とうのちゆうじょうらが集まり、それぞれの理想の相手あまよを話し合った「雨夜の品定め」の場面を描いています。

【図6】では更に場所を遊郭に移し、食事が済んだ遊女たちの姿に置き換えています。右端にいるのが『修紫田舎源氏』の主人公光氏みつうじで、隣の女性は火鉢で茶を煎じています。左の赤く塗られた台の物の上には大皿と塗物の箱と深鉢が描かれ、手前のおひつから女性が飯をよそっています。中央女性二人は食事を終え、爪楊枝をくわえながら手紙の内容が気になる様子です。静かに雨が降る夜に、華やかな女性たちが賑やかにおしゃべりする声は今にも聞こえてきそうな作品です。



【図5】歌川国貞(三代豊国)
「誂織時世好」弘化元年(1844)
味の素食の文化センター所蔵



【図6】歌川国貞(三代豊国)「やっしけんじ雨夜のしな定」安政2年(1855) 味の素食の文化センター所蔵

江戸時代の「食」の事情は江戸の町と地方では違いがあったようですが、東海道など主要街道の宿場では「名物」と称して、その地域ならではの食べ物が江戸の人々や旅行者にもてはやされ、旅の楽しみのひとつでもありました。

藤沢宿の名所(観光スポット)は今と同じく江の島が筆頭格で、そのイメージからか宿等で供される食事にも江の島名産の魚介類(アワビ・サザエなど)が中心でした。ヒシコナマス(ヒシコは小イワシのこと)が挙げられている記録もあります。アワビの粕漬は土産物として人気でした【図1】。



【図1】歌川広重
「諸国名産 相州江の嶋産 鮑かす漬・貝細工」制作年未詳



【図2】歌川国芳
「山海名産尽 相模ノ豎魚」
嘉永4年(1851)

近海では、藤沢・鎌倉沖の相模湾で獲れたカツオが、いわゆる江戸の初カツオで、こちらは名物として詩歌や浮世絵などにも取り上げられていますが、多くは江戸に送られ、藤沢で旅行者が口にするには無かったようです。【図2】では、富士山と江の島を背景に、海岸には漁船が横付けされ、カツオが水揚げされています。

藤沢宿の名物として五十三次双六に紹介されているものに「砂糖漬」があります。果物や野菜の砂糖漬けは各地にありますが、藤沢のものは、この地域の浜辺の名産であった「松露、初茸、坊風」を砂糖漬けにした菓子で、「三品漬」と称して文政の末頃(1830年頃)から売られていたという記録もあります(昭和戦前期までは市内で販売)。【図3】は、嘉永5年(1852)に歌川広重が制作した「東海道遊歴双六」の藤沢のコマに描かれた、「名ぶつ砂糖漬」と砂糖壺です。



【図3】歌川広重
「東海道遊歴双六」部分図

徒歩の旅に甘味は付き物ですが、江戸後期に書かれた十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』【図4】では、藤沢宿の手前の茶屋で二人が団子を頼み、火のついた団子を食べてしま



【図4】十返舎一九作・歌川国芳画
「東海道中画本膝栗毛」天保15年(1844)

って大慌て、というシーンがあります。この場面は浮世絵や双六に度々紹介されたため、団子が藤沢宿の名物であるかのように思われていたようです。藤沢の西、茅ヶ崎には「牡丹餅立場」があって、こちらは「ぼた餅」が名物でした。

また、「ぼた餅」ということでは、片瀬の龍口寺で毎年9月に行われる日蓮上人の法難会は参集者にゴマの付いた「ぼた餅」が振る舞われることで有名です。これも藤沢名物の一つといえましょう。

浮世絵のぼれ話 18

歌川国貞(三代豊国)と歌川広重の合筆



【図1】
歌川国貞(三代豊国)、歌川広重
「双筆五十三次 藤沢」

【図1】は安政元-4年(1854-57)にかけて出版された「そうひつごじゅうさんつぎ双筆五十三次」という、東海道の各宿場を描いた揃物のうち、藤沢を描いた図です。

東海道の揃物は、多くが風景を描いたものとなっていますが、「双筆五十三次」は手前に配された人物がメインで、風景は副次的なものとして奥のコマに収められています。

画面をよく見ると絵以外にいくつか文字が入っています。そのうち、人物の傍に大きく「豊国画」【図2】、コマの中に「広重画」【図3】とあります。これは、手前の人物を歌川国貞(三代豊国)(1786-1864)、奥のコマ絵の名所絵を歌川広重(1797-1858)が担当したことを示しています。いわゆるコラボレーションといえるこちらの手法は、当時は合筆と呼ばれていました。

合筆での揃物の出版は、浮世絵では弘化年間(1844-48)以降に頻繁に見られるようになります。同じく東海道の宿場を描いた揃物である「とうかいどうごじゅうさんついで東海道五十三対」も歌川国芳、歌川広重、歌川国貞(三代豊国)による合筆です【図4・5・6】。ただしこちらは1枚ずつ別の絵師が担当しています。同一シリーズを複数の絵師が分担して描く手法が多くみられるようになるのは、嘉永5年(1852)以降です。

明治時代に入っても度々見かけるこの合筆という手法は、この二人の絵師によって土台が築かれたといえるでしょう。



【図2】(図1画面左上部)
「豊国画」とある。右側に「彫竹」とあるのは彫師の名前。上の〇二つは改印。



【図3】(図1画面左下部)
「広重画」と「ヒロ」の字をもじって作った「ヒロ菱」が見られる



【図4】
歌川国貞(三代豊国)「東海道五十三対 神奈川の驛 浦島づか」



【図5】
歌川国芳「東海道五十三対 川崎」



【図6】
歌川広重「東海道五十三対 平塚」

